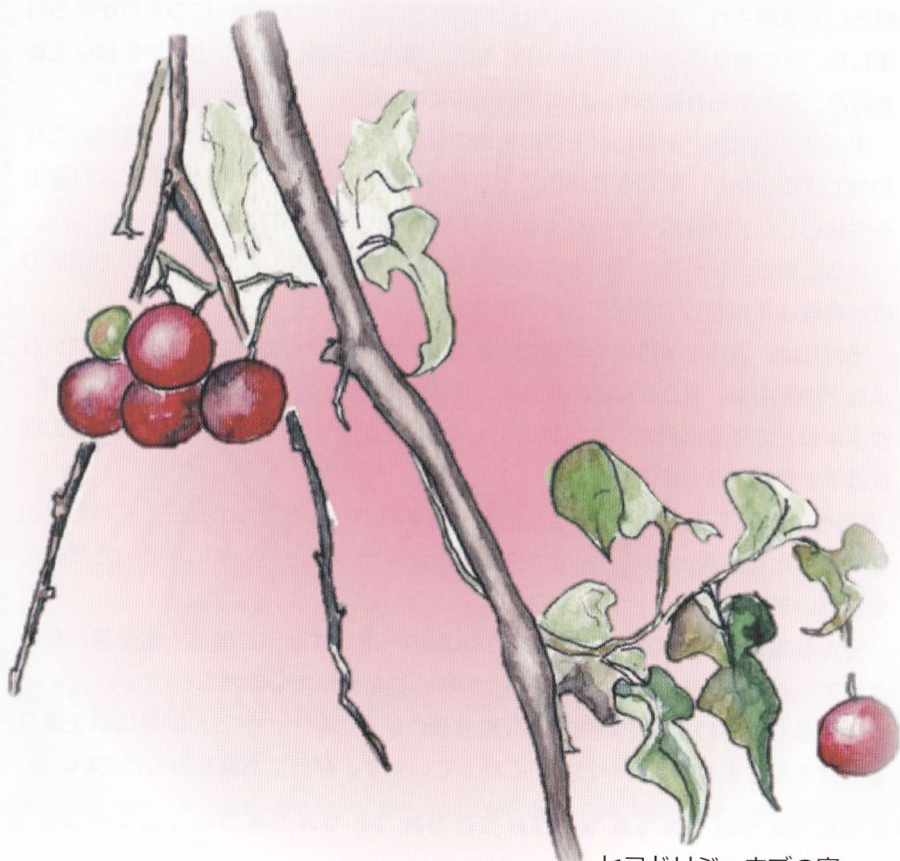


よしかわ の自然

さとやまとともに



ヒヨドリジョウゴの実

ようこそわがまち「よしかわ」へ

よしかわのまちは大阪北部に属し、妙見山、光明山、天台山、青貝山、高代寺山に囲まれ、それらの山々から初谷川と平井川が Y 字形に流れる自然豊かなところ です。

中山間地域にしては気候も比較的温暖で、まばゆいばかりの新緑の春、照りつける太陽の下でも木陰は涼しい夏、里山独特のコントラストが美しい紅葉の秋、適度な厳しさを持つ冬と、季節の移りかわりがはっきりと認識できるまちです。

過去に、常緑広葉樹林が伐採され萌芽力の強いクヌギ、コナラが植林され、隣の黒川地区と並んで薪炭やシイタケ産業が発展しました。山からの落ち葉は水田の肥料として活用され、よしかわの山々は持続可能な循環型の二次林につくりかえられました。その林は適度な日照を林床に与え、雨水を調節し豊かな山菜や多様な生物を育み、日本でも有数の里山が実現したのです。

里山は人の生活と密着し、そこに生活の基盤があったからこそ維持管理がおこなわれてきましたが、昭和30年代に入り薪炭に変わるエネルギーの台頭により里山を主体とした生活は成り立たなくなり、わがまちも大きく変遷してまいりました。

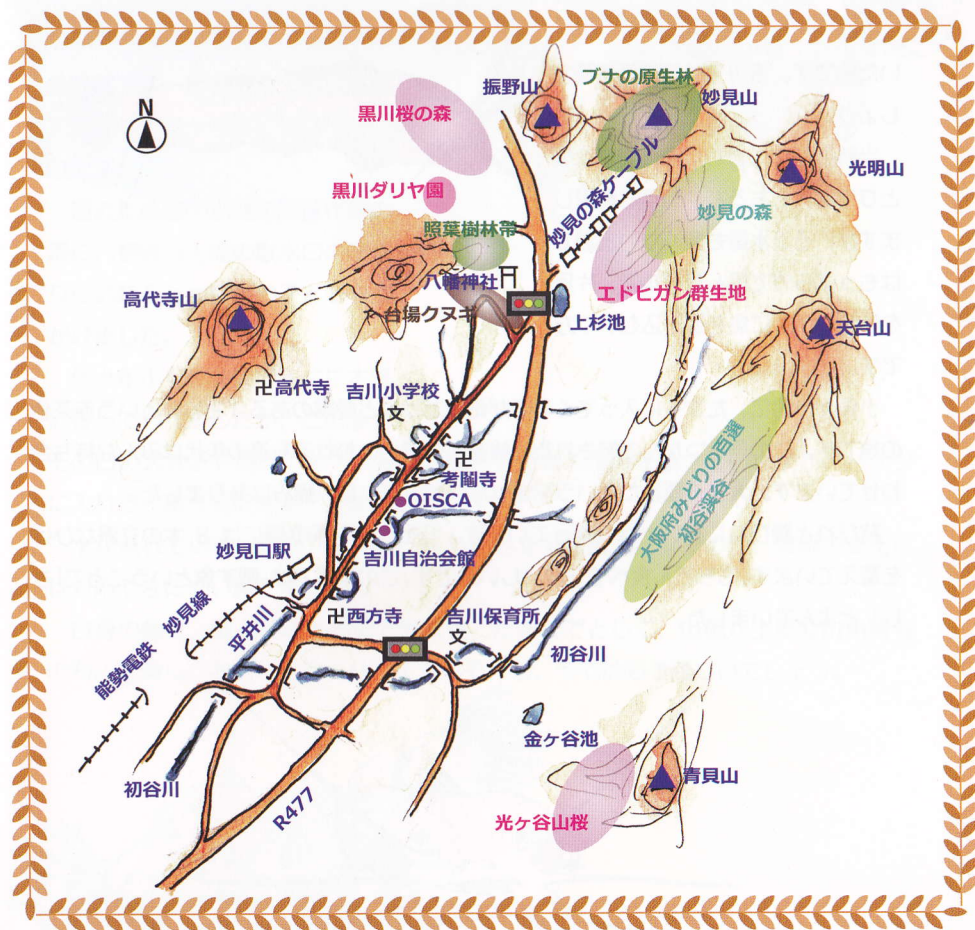
さらに最近の少子高齢化の波は山間部にいち早く押し寄せ、山林に次いで田畑の維持管理さえも難しくなってきました。

それらは、近年の土石流や河川の氾濫などの災害、ササユリなどの植物類やタガメなどの昆虫類、タニシなどの魚介類の絶滅や準絶滅化、リス、野ウサギ、キツネ、タヌキなどの生態系異常として表面化してきました。これらは全て、里山環境の機能低下を意味するものです。

過去を取り戻すことは出来ませんが、それぞれの方法で先人の残してくれた里山環境の劣化を防ぎ、この土地を訪れていただいたみなさまに楽しんでいただけたらと思います。

そんな思いの中、わがまちの自然のほんの一部ですが、この地で生を育んだ者として、滅びゆくもの、生きのびるもの等、ご紹介いたします。

大阪都心からわずか1時間で大阪最北端の鉄道の駅、のせでん妙見口駅を降り立てばそんなまち「よしかわ」が広がっています。存分にお楽しみください。



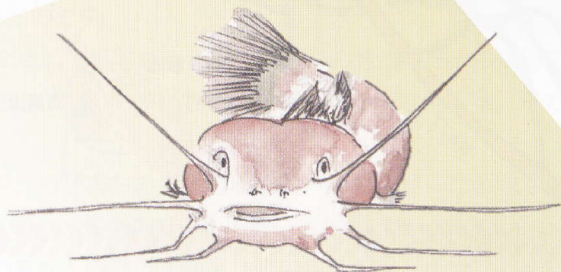
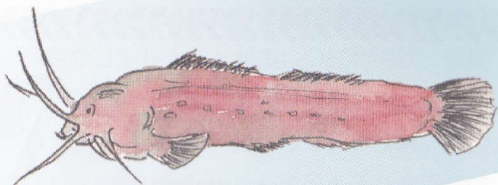
アカザ

昭和 30 年くらいまでは初谷川にいた魚です。吉川ではほぼ絶滅種でしょう。

当時の夏の子どもたちの遊びは魚とりです。もちろん、釣竿も利用しますが、そう水量も多くない浅瀬ではもっぱら竹で編んだザルで、片足を動かしザルに魚を追い込むやり方です。

小魚と一緒に、たま〜に入ってくるのが奇妙だけれど愛嬌のある「さし」という赤茶色の魚です。この魚をつかんで刺された経験を高齢者といわれる私達の年代はみんな持ち合わせています。大きく腫れたという記憶はないけれど、鋭い痛みはありました。

背びれと腹びれに鋭いとげを持っています。特徴はずん胴で顔には 8 本の立派なひげを蓄えています。もちろん食べてもおいしい魚です。この集落では、刺す魚ということで「さし」とよんでいました。



ドンコ

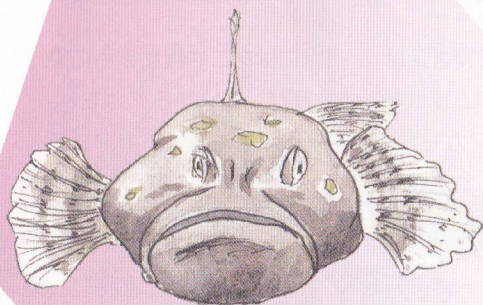
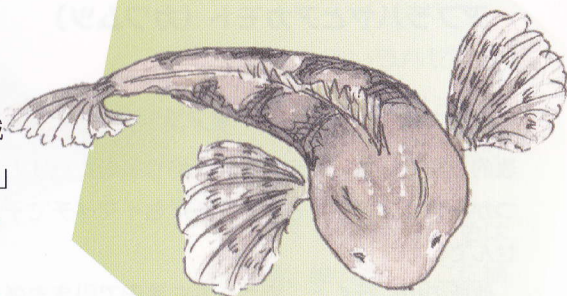
この魚は、よしかわでは準絶滅
危惧種です。初谷川の大型「ドタ」
または「ドタツパチ」というドン
コです。

最近ため池の水路の清掃作業の
際に、初谷川上流の取水口の溜ま
りにいた5 cm程度の子どもを見
かけました。

何十年ぶりの発見ですぐに本流
に移してやりましたが、この魚、
その口の大きさや顔のいかつさから、まさに王者の風格を備えていますが、バケツ
に入れると真っ先に死んでしまいます。

水が流れていないとダメなのか、それともすぐに酸欠になるのか、環境の変化に
は対応できにくい魚です。

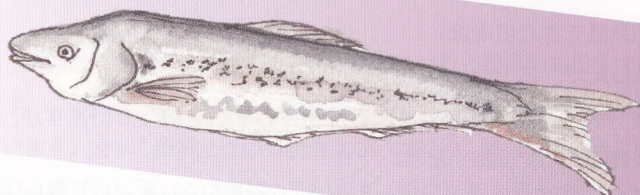
白身の魚で、酒と醤油と砂糖で煮炊き、たまごでとじて、山椒か生姜で川魚特有
の匂いを消し、おいしく食べられます。それも、今ではもう難しいでしょう。



アブラハヤとアカモト（カワムツ）

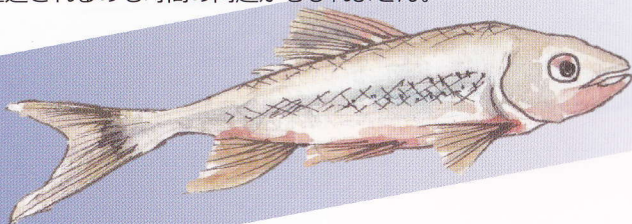
よしかわではアブラハヤをアブラジャコとよんでいました。よしかわの河川の代表的な魚でした。ミミズを餌に釣り糸をたらすと釣れるのはこの魚。ぬるぬるしてつかみ難く、食してもまずく姿形もイマイチで子供心にも歓迎された魚ではありませんでした。

他所の川に行くと、姿かたちも美形で引きも強く、から揚げにも出来るアカモトとよんでいた憧れの魚がいました。しかし、アカモトは初谷川ではほとんど見かけることがありませんでした。

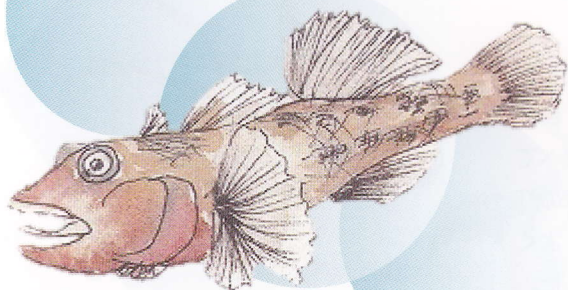


ところがいつの時代にかアカモト、シロモトが勢力を伸ばしアブラジャコは淘汰され逆転しています。

アカモトというのはカワムツの地方名で、オスは 8 月頃にはあごや腹が赤色に染まり、メスは変色せず白いままです。カワムツはモトとも呼び、赤いからアカモト、白いからシロモトとよんだのでしょう。アカモトは食物獲得競争にも強く、アブラジャコが駆逐されるのも時間の問題かもしれません。



ゴロキン (カワヨシノボリ)



ゴロキンというハゼ科の魚。地方によってはヨシノボリ、ハゼ、ゴリなどと呼ばれています。

体長5 cm前後で、色は茶、黒、紺、赤、そこに縞の入ったものなど種類は豊富でした。

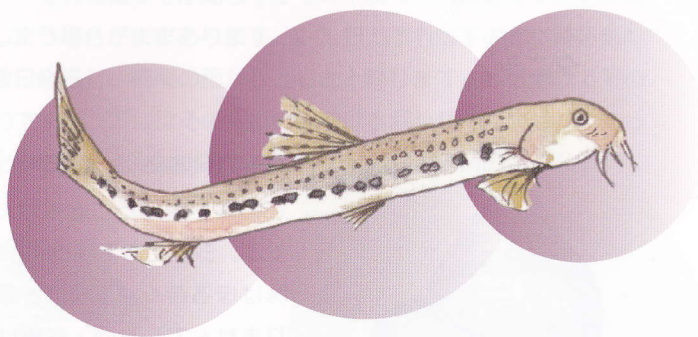
腹に吸盤を持ち、たんぼに水を引く川の堰があり、そこから落ちる水に逆らうようにたくさんへばりついていて、網を受けてひとなですればどっさりと取れたものです。今もいますが、数は何百分の一まで減っているように思います。

シマドジョウ

普通のドジョウはたんぼや水路の泥状のところに好んで生息していました。ところが、

このシマドジョウの身体は細長く黒色斑が縦に並んでおり、砂礫底にいたように思います。よしかわでは、光ヶ谷の小川にたくさんいましたが、今見ることはまずありません。普通のドジョウもほとんど見る事が出来ず、絶滅に時間はかかりません。

雑食性で劣悪な環境にも生き続けられるはずのドジョウがいなくなる原因は、土壌に浸透した化学農薬による食物連鎖でしょうか。



タガメ

昔、子どもの頃一番怖い昆虫でした。巨大なカマのような前足を持ち、自分より大きいカエルやヘビさえも食べてしまう。この大きさと、夜間人家の灯りを求めて飛行することでもでき、よく壁にぶつかるのを目撃していました。

失礼ながらグロテスクな体の持ち主も、流れのきつい川や山間部では棲まず、人の手が加わった、たんぼでもきれいな水で餌が豊富なところにしか生息しない贅沢な奴で、その環境が破壊されたのか今は見かけることはありません。



タニシ



タガメ同様、たんぼや水路にいたのはタニシ。この貝で遊んだこともなく、ただ毎日の食卓に並ぶ。シジミやアサリの小型化と思えばいいが、味はほろ苦く、うまいと思ったことは一度もありませんでしたが、栄養はたっぷりであったらしいです。

そのタニシ、今なれば酒の肴にと思えどもタガメ同様、主な生活圏はたんぼ、農薬の犠牲になったか絶滅して見かけなくなって久しいです。

モリアオガエル

大阪府では準絶滅危惧種に指定されていますが、わがまちよしかわでは、あっちこっちの湖沼や野山の水溜りの樹の枝にぶら下がる卵を見ることが出来ます。

モリアオガエルは落ちれば水の上というところに卵を産みます。毎年、6月から7月初旬に池や初谷溪谷で見ることが出来ます。

この蛙も時々ミスをしします。落ちれば水溜りがあるはずが、それは一時的に水がたまっていた・・・大雨が降って水たまりができた・・・それを知ってか知らずかその水溜りを目指してその上の樹上に卵を産み付けてしまう場合がままあります。2-3日もすれば下の水は跡形もなくなります。そして数日経過し、梅雨の雨がしとしとと降りますと卵は溶けて下の水溜りに落ちていくのですが、下にはその程度の雨では水溜りがありません。あってもあくる日には・・・おたまじゃくしの運命は決まります。自然の厳しい摂理です。



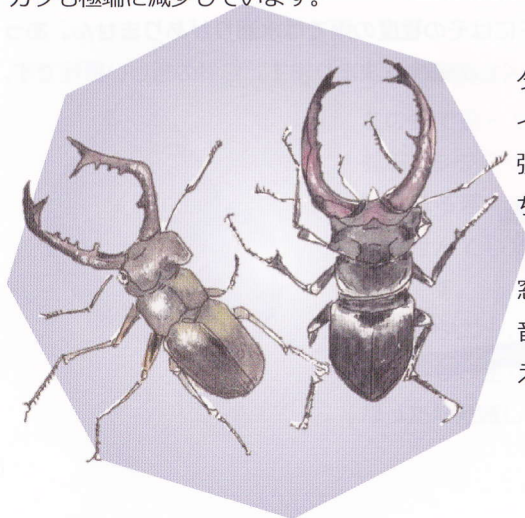
カブト虫

里山の雑木林なら何処にでも見られる虫ですが、薪炭業などがすたれたことでクヌギやコナラなどの伐採・萌芽のサイクルが機能しなくなり、若い木から出る虫たちの餌の樹液がなくなったり、自然破壊などで環境が悪化し減少の一途をたっています。



クワガタ虫

クワガタ虫の生存は厳しく、60年前にはひと夏に5匹も6匹も見つけたオオクワガタはほとんどみかけることがなくなりました。ミヤマクワガタやノコギリクワガタも極端に減少しています。



この地方では、ノコギリクワガタをゲンジ、ミヤマクワガタをヘイケとよんでいました。どちらが強いかわせて遊ぶのが子どもたちの夏の楽しみでもありました。

また夜間、灯りを求めて飛来し、窓や軒先に当たりゴツンゴツンと音がすれば、必ずこの虫たちを捉えることが出来ました。

ササユリ

里山の特徴的な花はササユリです。
6月から7月初旬にかけて周辺の笹に
支えられて、風に見え隠れして咲く花
です。見えなくてもその匂いで存在感
を示します。

50年ほど前、炭焼きが行われてい
た頃は若いクヌギ林の中にたくさん生
えていました。ある一定の期間は林床に日が当たることで成育するこの花は、里山
環境の変化やシカ・イノシシによる犠牲もあり消滅寸前です。



シュンラン

シュンランも里山環境の変化のせいか最
近はほとんど見かけません。

いつも父についていく山にいっぱいあっ
た記憶は鮮明です。この季節、里はたんぼ
の準備で忙しいはずなのに何故山に行った
のでしょうか。薪をとりに入ったのか冬のク
ヌギの伐採の片づけだったのでしょうか。

そこは、クヌギ林と松林の境界で、早春
の林床に光が届く明るい場所でした。種が
落ちてから数十年間も土中で眠っていると
いわれるこの花は、まだ眠り続けているの
でしょうか。



ギンリョウソウ



初夏の頃、薄暗い松林か雑木林の腐葉土の一杯積もった場所に生えているギンリョウソウです。群生する花ですが、吉川ではポツリポツリとしか見つけられません。別名ユウレイタケと呼ばれているのがうなずける容姿です。あまり光がささない林床で全盛期は純白若しくは透き通った銀色に輝き、光合成する必要がないので一片の緑もありません。不思議な花です。

ヤマシャクヤク

吉川の某場所に咲いているのは環境省レッドリストの準絶滅危惧種に指定されている人里離れた杉林に咲く白いヤマシャクヤクです。

いつ頃からあったのか分かりませんが、環境が変わらなければ将来群生になるとおもわれますが、現状を見る限り儚い希望です。

去りゆくものの美しさか、咲けば直ぐに散るので鑑賞のタイミングが難しいですが容姿は絶品です。



ツリフネソウ

吉川では絶滅したか、又は準絶滅でしょう。貴重な花です。昭和 20 年後半たんぼの水路や川の水辺に群生していました。子どもの頃花に興味があったわけでもないのに非常に印象に残っているのは、水辺から川面にかかっているこの草の下には多くの小魚がいたこと、深水では釣り糸がこの花によく引っかかったこと、更に当時は何処の家でもニワトリが数羽いたので、この草をきざんでやっていたことによるものです。いつの頃からか見なくなり忘れ去っていたのですが、4 年前（2009 年 10 月）に偶然にも昔の場所で発見、懐かしさのあまりにスケッチしたのがこの絵です。水辺から引っっこ抜くとすぐにしおれてしまうのは昔と変わりません。それから毎年楽しみにしているのですが、以降、全く見る事が出来ません。



ツリフネソウの花は特徴の有る形をしていますが、調べるとそれにはそれなりの理由があることが分かります。生物が次世代につないでいくために必要な受粉をマルハナバチに頼っていること、そのハチの構造にあわせて花びらが出来ていることなど興味深い花です。

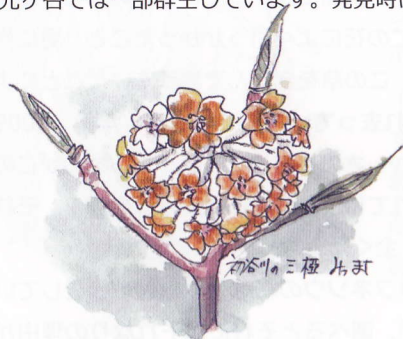
受粉をこのハチに頼っている他の花にはサクラソウがあります。そのサクラソウが激減しています。サクラソウと里山崩壊には関連が……。ツリフネソウとサクラソウは同様の運命をたどるのか、興味深いところです。

詳しくは以下の文献を推奨します。

（『さとやま——生物多様性と生態系模様』 鷲谷いづみ著 岩波ジュニア新書）

三桠（みつまた）

早春に咲く三桠は、その枝が三つに分岐するためこの名がついたといわれています。沈丁花に似ていますが匂いは余りきつくありません。この三桠、初谷溪谷上流に点在し、光ヶ谷では一部群生しています。発見時は、こんなところに黄色い花、周囲の環境にも



なじまず場違い、鳥が運んできたか、建設機械についてきたか不思議でした。調べると上質の和紙の原料で紙幣にも使用されているとありました。更に調べると、この三桠は人的によしかわの産業として植えられていたようなのです。

吉川村史によれば明治 23 年当時 1,200 慣（4.5 トン）出荷されています。当時牛が

50 頭とありますから、大八車で運んだのでしょうか。明治 33 年以降記述がないことを見れば廃れたのでしょうか。上炭 1 貫 4 銭のとき三桠 1 貫 20 銭だったのに。

アセビ

春一番といえばアセビです。

このありふれた木の花は、よしかわでもいたるところに咲いています。山に面した東ときわ台から光ヶ谷に掛けてが特に多く見られ、道路一面に花房が落ちているのを見ると春が過ぎ去っていくのが感じられます。



あとがき

よしかわの里山には、まだ多様な動物や植物が生息・生育しています。ここに記載したものはほんのごく一部ですが、生き続けるもの、環境の変化についていけず数を減らしているもの、環境の変化を利用して増え続けるもの、それぞれです。野ウサギやキツネ、タヌキ、リスは減少組で、野生シカは増加組です。

犬は鎖につながれペット化し、野生シカを追い出すこともできず、高齢化と生活様式の変化により里山は手入れされず、また、従来のようにクヌギ、コナラが伐採されてもその萌芽は全て食害に遭い、枯れてしまいます。

放置された里山には、桜や藤が咲き乱れ、また別の楽しみを与えてはくれますが。。。。

表紙は「ヒヨドリジョウゴ」の実です。

いつも通る道、冬枯れの竹やぶのそば、つるのくせに巻きつこうとせず、ただなんとなく誰かに寄り添って頼りなげに。風が吹けば揺られて葉の陰に見え隠れし、逆光の木漏れ日の中でひときわ輝く、透き通るようなルビー色の果実。晩夏に白い可愛い花をつけるヒヨドリジョウゴ。ゆく冬を見届けるように、雪を帽子に早春まで命を繫ぎます。



絵と文 : 向井 勝

発行 : 平成 26 年 3 月

豊能町吉川自治会館 ふるさとの風推進会

この冊子は、大阪ミュージアム基金を活用して作成されました。



大阪ミュージアム構想

"Osaka, The Museum" Concept